

哲学と地域再生の基点

荒木, 正見

地域健康文化学研究所 : 理事長 | NPO法人和の文化研究会 : 理事長 | 尾道学研究会 : 顧問

<https://doi.org/10.15017/26548>

出版情報 : 地域健康文化学論輯. 5, pp.13-20, 2011-09-30. 地域健康文化学会
バージョン :
権利関係 :

哲学と地域再生の基点

荒木 正見

序

この論文は地域再生を考える際の発想の基点を、哲学という根底的な学問から考察し、仮想の町に対する提言という例を提起して、その方法論を述べるものである。

考察の柱を前もって述べれば以下の三点である。

第一点は、場所の理論、すなわち場所は個を限定し個は場所を表現することで限定する、そしてこれらの相互限定のダイナミズムが歴史を作る、という理論を導入することである。

第二点は、発達の理論すなわち、社会は本来的に人格発達や社会全体の成熟をめざすものだということである。この発達や成熟の目安は、生存である。より生存力の強い方向性が発達や成熟ということになる。人間の場合は以下の危機管理とも関連して、知識がその大きな役割を担っている。

第三点は危機管理の理論すなわち、文化や論理は最後の危機管理だということである。一見してすぐに役立つような事柄は、日常的には大いに役に立つが、未曾有の災害などを想定し、あれこれと論理的に考えることや、何の役に立つのかとすぐには答えられない文化的知恵は、これまで出会ったことのない危機が迫ったときには、どれかが役に立つかもしれないという考え方である。

筆者はこれらの柱をもって、各地のまちづくり、ひとづくりに関わってきたが、その場合、柱は柱として意識しつつも、具体的にはどこかよその方法押し付けるのではなく、そのまちの個性や歴史や、そのまちの方々のそれまでの取り組みを大切にるところから始めなければならないことを強く訴えてきた。このことが、以上の三点の相互関係から導かれることを、この論文の最終的な見通しとする。

なお引用のうち旧漢字旧かなは、現在のものに直した。

1. 場所の理論と発達の理論

この章では、序の第一点、第二点、第三点に関して西田幾多郎の場所論を参照しつつ考察する。

西田幾多郎は、「場所」という語を、唯一絶対的な全存在の意味で用いる。宗教では例えばそれを、唯一絶対的な神と呼んだりもするが、それぞれの宗教的な傾向性を避けて完全に構造的な意味を持たせるために、結局は全存在のありかと呼ぶしかないとして「場所」という名称を与えた（西田幾多郎「場所」大正15年『西田幾多郎全集 第四巻』、岩波書店、1949年／1988年、208～289頁）。

ところで、西田幾多郎が晩年にいたって改めて宗教と場所の関係について考察したものが「場所的論理と宗教的世界観」（執筆昭和 20 年・刊行昭和 21 年『西田幾多郎全集 第十一巻』、岩波書店、1949 年／1988 年、371～464 頁）である。これは場所論を基点にして各宗教との関係について述べたもので、宗教というわれわれの日常と、場所の理論との関係が明確に示される。ここではその一部から場所理解を深めたい。

まず、場所を唯一絶対的な存在と述べる際の「絶対」について、「場所的論理と宗教的世界観」では次のように述べられている。

「絶対は、無に対することによって、真の絶対であるのである。絶対の無に対することによって絶対の有であるのである。」（397 頁）とされ、「自己の外に対象的に自己に対して立つ何物もなく」（397 頁）と述べられるように、「真の絶対」は対象的な何物をも自己の外に持ち得ないという意味での、「無」に対していえるのである。従って、この「無に対して」というのは、自己の外にある何かとしての無、ではなく、自己自身の絶対的有という定義自身に含まれる無であり、自己に含まれていながら自己ではない意味を有するというのである。このことを「自己が自己矛盾的に自己自身に対する」（397 頁）と述べられる。また、このようなあり方一般を指す「矛盾的自己同一」とも述べられる。「自己同一」とされるのは、「自己矛盾的に自己自身に対する」ことによって、自己の本質的在り方を保っているからである。それは例えば「赤い色」は赤い色以外のすべての事柄の否定があつてこそそれが本質的に存在しているのである。

さて、いま「神」を唯一絶対的な存在と考えるならば、その神については、上記の概念を当てはめて「神は絶対の自己否定として、逆対応的に自己自身に対し、自己自身の中に絶対的自己否定を含むものなるが故に、自己自身によってあるものであり、絶対の無なるが故に絶対の有であるのである。」（398 頁）と述べられることになる。

そして、これを一步進めて、「絶対の無なるが故に絶対の有であるのである。絶対の無にして有なるが故に、能（あた）わざる所なく、知らざる所ない、全智全能である。」（398 頁）と、世界に遍く存在するが故に、また、有も無も自己自身である故に、全智全能であることが述べられる。

そしてこのことからさらに、「仏あつて衆生あり、衆生あつて仏があるという、創造者としての神あつて創造物としての世界あり、逆に創造物としての世界あつて神がある」と考える」（398 頁）と述べられる。無という抽象的な概念からいきなり具体的な衆生や世界が出て来る様に見えるが、論理的には、絶対的な無であるから、絶対的な有に対する事柄、すなわち構造的に、すべての具体的な事柄を挙げ得ると考えるのである。そして、矛盾的自己同一を考量すれば、それら否定的な事柄あつてこそ、当の有が成り立ち得るのである。

そこから場所論の基本構造が示されることになる。すなわち、「真の全体的一は真の個物的多において自己自身を有つ」（398 頁）と述べられることになる。

構造を静的に述べればこのような記述に帰着するが、さらに動的な展開として考察されるのが「創造作用」の考察である。

「創造」については、「絶対矛盾的自己同一的世界は、自己否定的に、何処までも自己において自己を表現するとともに、否定の否定として自己肯定的に、何処までも自己において自己自身を形成する、即ち創造的である。」（402 頁）とされるように、場所的有すなわち絶対的な世界はじっとしているのではなく不断の自己発展を遂げているが、それが創造作用であるというのである。

そして、創造作用は「矛盾的自己同一的世界が自己の中に自己を表現し、自己自身を表現することによって自己自身を形成して行く。かかる絶対者の自己表現が、宗教的に神の啓示と考えられるものであり、かかる自己形成が宗教的に神の意志と考えられるものである。」(403頁)とされるように、表現作用を伴う。ここに個の存在理由がある。すなわち、個は絶対者の自己表現であり、個の存在や発展こそが絶対者の存在の証である。端的に言えば、有限な存在であるわれわれは絶対者を直接に認識出来ないが、無限に繰り返される絶対者の自己表現の運動、すなわち創造作用によってその統合的存在としての絶対者を知るのである。

さて、この創造作用はわれわれの目には歴史として示される。「歴史的世界は、絶対者の自己限定として、絶対現代的に成立する。故に表現するものとせられるものが一に、自己自身を表現する絶対者の自己表現として、何処までも自己自身の中に自己表現を含み、自己表現的に自己自身を形成する。」(456頁)と述べられるように、個々の歴史的現象は個々のそれ自体の表現でもあり、絶対者の自己表現でもあるのである。しかもこれまでの経緯を鑑みれば、絶対者の発展は個の発展にかかっているし、個の発展は絶対者の発展にかかっているといえるのである。

ここにたって、序で述べた第一点と第二点の構造的意義が確認出来たといえるが、ここから、第三点について展開的に考察出来る。

問題の焦点は、絶対者の創造作用の目的はなにか、という点にある。

そこに求められる解答はさまざまに考えられるが、論理的に最も矛盾しない解答は「生存」である。存在し生存しているもの自身が生存を否定することは論理的に矛盾していることはいままでもない。絶対者の創造作用即ち歴史は、究極的には生存を目的としているといわねばならない。すなわち歴史上の個々の現象は、時には生存に反する事態をも孕みつつも究極的には全体の生存を目指して試行錯誤する過程であり軌跡であると考えられる。もちろんこの考え方に対して、絶対者はもっと単純に平和な楽園を実現しようとはしないのか、という反論も想定出来よう。しかし、単純になるということは、何かを見捨てることになる。多様な存在であることと、単純な存在であることのどちらが発展的かといえば、やはり多様性を選ばざるを得ない。そのほうが生存可能性を高めるからである。もしどこかの変化の過程で危機的な状態が生じて、多様性があれば多様性のどこかの切り口で対応することが可能になる。単純であればあるほど、いわば免疫機能は希薄であるといえる。もちろん、その中であって綿々と積み上げられてきた生存の智慧を無視してはならない。例えば、人を殺す方法は多様に知っておかねば危機管理出来ないが、その知識を決して実行してはならない、といった真の智慧を持たねばならないのである。

ともあれ、世界は生存を目指して刻々と進化している。この発展を背景にしてすべての人間の活動は展開していると考えべきである。

2. 具体的考察、その前提

さて、以上の各点を頭において特定の地域の考察のしかたを提示してみたいが、理論的な展開として、いまずぐ出来る事から将来的な理想像までを提起することとする。

さらに考察のイメージ作りの助けとして、仮想的な地域として、瀬戸内のある港町の旧歓

楽街を考察の対象として設定する。

この港町は古代より瀬戸内海航路の要衝として経済的文化的に発展してきたが、第二次世界大戦を契機として、交通手段の変化に伴い港湾都市としての機能が衰退しそれに伴って港町にありがちな歓楽街も衰退した、という設定とする。もちろん智恵の集積のあるこの町だけに、古代より続く造船業や食品製造業、文化遺産を生かした観光、そして陸上交通の拠点作りなどと、町の発展を企画し、それなりの発展を維持してはいるが、やはり、歓楽街となると、意識の変化もあって衰退が目立つという設定にする。

この設定は任意ではあるが、現在のわが国の多くの都市が抱えている問題を組み合わせていることも理解されうるところである。

さて、以上の設定から、序の各点を考量しつつ、現状をより詳細に考察すると、次のような各点を指摘しなければならない。

第一点には食事・娯楽に対する意識変化があげられる。先の第二点、発達の理論からいえるように、いまや社会は健康志向の潮流にある。先の第一点、場所の理論の「場所が個を限定する」ダイナミズムからいえば、世界という場所が健康志向という限定の力をもってこの歓楽街という個を限定しにかかっているわけである。したがって、この歓楽街はそれを受け入れつつ、この歓楽街らしく表現しなければならない。

第二点は、世界的な危機管理意識の高まりがあげられる。世界の発展が生存を目指すものであればこれは当然であるが、これもこの歓楽街に当てはめれば、古い町だけに老朽家屋の問題や、大火災の一因にもなりかねない細い路地の問題に結びつく。また港町の歓楽街に多く見られるような埋立地の場合には地震の際の液状化現象に弱いことも考慮しなければならない。

第三点は、全国各地に展開する個性的な町づくりの流れが挙げられる。よりわかり易くいえば、そこにしかないものの追求である。多様性が生存の方向ならば、各地域が個性的なまちづくりを意図するのは当然であるが、この歓楽街にしかないものをどのように求め表現していけばよいのであろうか。手がかりは歴史にあることも前章の考察から示唆されるところである。

第四点は、全国的な規模で展開する交通体系・産業構造・地域体系の変化である。これまでの小規模なまちづくりの発想では届かない広域的な変化が起こっている中で、いま必要なまちづくりとはなにかという問題である。

ここで、この歓楽街を包むこの港町の変化の現状に触れておかねばならない。場所の理論の構造は、この港町とこの歓楽街との関係にも適応出来るからである。

この場合にもにも序の三点を意識しなければならないが、その場合特に注目すべきは個性、特に他の地域に比べて優位であるべき問題と危機管理の問題である。

この港町の優位な点はいかなる町にせよ歴史的には数多く挙げられる。その歴史的遺産（決してモノばかりではない）を参考にしつつ現在の市政はテーマを絞って取り組んでいるはずである、

例えば今、市政の中心テーマが健康保養都市を目指そうとして、例えば長期滞在型老人ホームを建設したり、サイクリングによる健康づくりを目指して、道路や施設の整備をしたりなどしているとする。その背景としての歴史を鑑みれば、古来健康保養都市であったことが考えられる。

この場合、健康とは心身両面の健康、つまり総合的健康である。温暖な気候と美しい風景を求めて療養や保養を目的とした来訪者がいて、それを受け入れる宿や歓楽街があり、製薬所や醸造所があることで発展してきたという歴史に示されるのなら、現在の市政の取り組みはいわば正解であるといえる。さらに、心の健康としては、港町特有の、信仰、芸術、文化が花開いたまちだということが挙げられる。それらすべてを経済的に支えてきたのが海上交通の拠点という事実であり、交通の拠点には知恵と産業と文化が集積することは常識である。さらに瀬戸内のこの港町という設定からは、それに風光明媚が付け加えられ得るであろう。

ところで現在、わが国では海上交通は影を潜め、造船のような巨大産業も以前ほどではなくなってしまっているが、それに代わって陸上交通網が張り巡らせられようとしている。例えば陸上交通網の交点ともなれば物流の拠点として重要な位置を占めることになる。港町の再生として、今後は陸上交通網・地場産業・文化的資産などの集積を手がかりにして、経済的発展を遂げることが予測される。そのためには、広域合併によって多様に広がった商業・製造業・農漁業・学問・教育・医療・文化資産などの再構成が求められることになる。

このように一歓楽街を語るのに大きな当の港町全体のことを語ったが、それは、この歓楽街の個性を呼び起こすための前提でもある。個性とは普遍性の特殊な構成である。他と違ってばかりの特殊性を強調すると、全体のあり方から浮いてしまう。例えば人間の場合には、完全に特殊であったら誰ともコミュニケーションが出来なくなる。普遍とは可能的共通性といわれるが、例えばこの港町と関係するものならずべて可能的にはこの港町に共通の要素を持ちうるという、そのような性質をいう。このような普遍的な要因を探るには歴史的にどのように本質づけられてきたかを考えればよい。

では、先に概略的に述べたようなこの港町をこの歓楽街にとっての普遍だとすれば、この歓楽街の個性をどのように発展へと具体化していけばよいのであろうか。即ち、いまのこの歓楽街の諸現象をどのように構成すればよいのであろうか。特に歴史的に優位な点を生かすことが望まれることはいうまでもない。

さて具体的な再生の考え方に入る前に、危機管理に関しても考えておかねばならない。このような港町全体は往々にして狭い路地が入り組み、火災の危険と隣り合わせである。さらに、地盤の問題である。斜面地は比較的固い地盤とはいうもののやはり豪雨の度に心配が募る。またこの歓楽街のような埋立地は地震の際の液状化現象が心配である。瀬戸内海沿岸は太平洋岸の巨大地震からは遠いといわれるが実は直下型地震の起こりやすいところだともいわれる。これらを意識して暮らさなければならない。

3. 歓楽街再生への提言

このような港町に抱かれてこの歓楽街は存在してきた。その再生に向けてどのように考えればよいかを、これまでの考えをふまえて述べてみる。

はじめにコストパフォーマンスから考える。当然のことながら、再生に向けては経済性を無視出来ない。無駄を排して合理的に事を行うことがコストパフォーマンスであるが、

歓楽街の場合は意外と困難である。そもそも歓楽街とは無駄を楽しむところだからである。金もうけや日々の仕事を忘れて一時を楽しく過ごすところだったはずで、それだからこそ好況不況が影響しやすいのである。従ってこの港町に景気が戻ってくればおのずから繁栄するはずだし、現在の市政は市の経済を浮揚させるべく懸命の努力をされており、その結果は徐々に見えてくるであろう。それなら待つだけでよいので、コストは最小で済むのだからただ待てばよいではないか、という考えも生まれるがそうはいかない。始めに列記した中の発達理論があるからである。場所の理論から普遍的な場所に目を向ければ、この港町という場所が、いな日本という場所が景気を取り戻すためには、発達や成熟を意識して施策を練る。世界中が発達や成熟をめざして変化しているのだから、すべて発達に向けて施策していかなければならない。

そして、この歓楽街にとって成熟のための第一に必要な条件は「安全」である。かつては人的にも危険なところで、子どもは足を踏み入れてはならないといわれた土地だからこそ、「安全」が再生の重要なキーワードになる。そして災害からの安全については、地域の方々の献身的な努力が求められるが、このように安全とはまず人によって守られるものである。地域の和が強固な場所は安全が保たれる。歴史的に地域の和はお祭りによって守られてきたが、このような歓楽街にも古くからの神社があり、多くの場合、住民がこぞってのお祭りが行われる。このような祭りを基盤とする人の和作りは、近代的な商店街の統一セールなどにも見られる。このような地域の和を活かしてより近代的な和を作ることは安全を守るひとつの手掛かりである。

物的な点では、火災からの安全は端的に防火壁を必要とする。都市の場合それはビルによって代替される。現在の歓楽街ではやはり建て直す場合にはコンクリート製のビルになるケースが多いようで、防火壁の役割を果たそうとしている。ただし、それにしても防火壁を意識する設計にすることが必要不可欠である。また同時に、このビルは地震に強い設計にしておかねばならない。このような地は江戸時代から埋め立てられて出来た土地が多く、液状化現象が起りやすい地盤である。

ところで、そのような建て替えの場合、後述するような未来への発展のためには歴史的遺産を維持しておくことも必要である。それこそがこの歓楽街の個性だからである。

さて、各地の旧歓楽街を調査すると、都市化によって住宅地やマンション街へと生まれ変わっている例も目にする。一方、歓楽街をそのように変えるほどの条件はまだ整ってなければ、現在の状況の延長線上に考えなければならないが、その場合でも最も必要なことは、そこに暮らす方々の健康と安全である。現在の居住者を重視して、居住地としても快適な環境を創るという意識を持てば、具体的に何をすればよいかが見えてくる。

次に、町の発達と成熟を考えれば、高齢者と若者にも支持されるまちを創らねばならない。かつての壮年の働き盛りがきらびやかで猥雑な路地を埋めた光景は、例え景気が回復してもおそらく帰ってこないと思われる。社会の成熟が加速している今、壮年は日夜知識の獲得や仕事の発展にエネルギーを費やさなければならない。個人が親しむ娯楽の質を問われ、それが人事にも影響する社会になりつつある。しかし、人生には癒しや歓楽も必要である。高齢者が増えている今こそこの港町は手軽な癒しの地だということをアピールすればよいと思われる。そのためにはこの港町を訪問する高齢者がくつろげる空間が求められる。他方、若者の訪問者も増加している。映画、ドラマやアニメ、インターネットなどによってこのような町の魅力を知り、この町を目指す若者は多いのだが、やはり若者らし

くくつろげる場所を探している。いずれも安価で清潔で安心出来る環境が求められる。こうして、客層を広げることが必要であろう。

ところで、それだけなら他の土地もあればこの港町の他のエリアだって、ということにもなる。重要なのは個性化であり他との差別化である。発達的に捉えれば、この港町全体の変化のうちどこを受け持つのかということである。つまり、広域市の一翼を担う一拠点地区として、他の地区との違いを打ち出さなければならない。その場合、歴史的遺産はもっとも個性的なものという常識が助けになる。例えばこのような地区は往々にして、かつて米問屋があり、銀行や商業学校、芝居小屋などさえある独立国的な中心地である場合が多い。荷揚げのための雁木なども残っているかもしれない。おそらくは神社を中心にした祭りという文化もあるであろう。今では過去の遺産となった置屋も、文化として語られる時代になった。それらをランドマークとして、この歓楽街の地図を作り、散策コースを設定すれば、昼間の集客対策にもなる。もちろん、安全を確保しライトアップして夜の風情を作るのもまたよい。このような歓楽街はとかく小ぢんまりした水槽の中のようなまちだけに、手軽にムード作りが出来るであろう。

この先はさらに発展的な見通しである。初めに述べた危機管理の理論が助けになる。すべて文化というものは発達していけば、学問、研究、教育、芸術へと昇華していく。学問や研究や論理や芸術は日常すぐには役に立たないかもしれないが、危機管理の窮極として、なにか困った時にはその威力を発揮する。子どもが入ってはならないといわれた歓楽街だからこそ、逆に他に先駆けた発達目標としてこれら、学問、研究、教育などを導入出来れば画期的な再生を見ることが出来る。歓楽街の歓楽的要素の中には社会の成熟発達によって捨てなければならないものもあるかもしれないが、反面、伝えなければならないものもある。

例えば、伝統的な食文化やサブカルチャーを歴史的に調査し、資料を収集し、発展的・成熟型に再現するつもりで、研究や調査、教育の拠点作りを作ることを提言する。その場合には現在眠っている歴史的施設の活用は必須である。身近なところで、飲食店員の方々のマナーや知識向上、健康向上のための講座やワークショップからでも行えばよいのである。さらに一例であるが、「歴史と食文化のまち」といったようなキャッチコピーを作り、それにちなむさまざまなイベントを実行するとともに、それにふさわしい教育、研究、資料収集の基地を作ればよいのである。

このように考えれば、この町全体が、発達した娯楽性をも維持しつつ食文化の研究所の役割をも有することになる。一見対極にあるような両者が結びつくことで、より発達した文化の町が生まれる。このことを目標に、一歓楽街が見違えるような脱皮を図った時、真の再生が訪れるのではないだろうか。

4. 再生への道

以上、小論は、主に西田幾多郎の場所論のいくつかの切り口を基点として、地域再生のための設計図のようなものを、目先の問題から大きな目標までの連続的な図式として提起してみた。この仮想の歓楽街に限らず地域の方々とその地域を愛するみんなで各地域を同

様に活性化していくことが本来の目的である。

そして、小論で言及してきた基本構造を、それぞれの地域の発展に当てはめて発展を促すそれらすべての相乗効果こそが、地域の発展の最も重要な条件であることはいうまでもない。

さらに、小論で言及してきた基本構造を、具体的な各地域に適合させて、それらの地域にふさわしい再生に向けた提言を実践することこそが、今後求められる重要な課題である。そのためにも、小論の基点に関係する理論のいっそうの深まりが求められる。

引用文献

西田幾多郎「場所」大正 15 年『西田幾多郎全集 第四巻』、岩波書店、1949 年／1988 年
西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」（執筆昭和 20 年・刊行昭和 21 年『西田幾多郎全集 第十一巻』、岩波書店、1949 年／1988 年

[Philosophy and cardinal points of area's rebirth]

[ARAKI Masami・地域健康文化学研究所理事長・NPO 法人和の文化研究会理事長・尾道学研究会顧問]